

学園大戦ヴァルキリーズ新小説版

- YOU ARE NOT ALONE 1948 -

名無しの東北県人(本文)

Heiment(監修)

登場人物

■ エレナ・ヴィレンスカヤ

本作の主人公。

ヴォルクグラード人民学園所属のヴァルキリー。

元ヴォルクグラード学園軍中尉でありタスクフォース563に所属していた。

学園軍在籍時代、凄惨な虐殺行為に加担した経験を持つ人間の屑である。

■ エーリヒ・シュヴァンクマイエル

民間軍事企業スピリットウルフ社の最高責任者。

シュネーヴァルト学園軍時代にはタスクフォース609を指揮した人間の屑である。

■ ノエル・フォルテンマイヤー

民間軍事企業スピリットウルフ社の統括本部長を務めるヴァルキリー。

元シュネーヴァルト学園軍中尉でかつてはタスクフォース609に身を置いていた。

人間の手足を生きたまま切断すること至上の喜びを感じる人間の屑である。

■ ソノカ・リントベルク

民間軍事企業スピリットウルフ社に所属するヴァルキリー。

タスクフォース609の元メンバーであり戦争狂にして自他共に認める皮肉屋。空飛ぶスパゲッティ・モンスター教の教えに従い平気で人を殺す人間の屑である。

■ キャロライン・ダークホーム

民間軍事企業スピリットウルフ社に所属するヴァルキリー。

かつてはPSOB・SASの隊員としてアルカ各地で秘密作戦に従事していた。アルカを自らの趣味と実益を兼ねた場と考える人間の屑である。

■ サブラ・グリーンゴールド

シャローム学園所属のヴァルキリー。

シャローム学園軍中佐であり、海軍特殊部隊シャイエテット13に所属している。

イスラエルの国益のためならばありとあらゆる悪行を正当化する人間の屑である。

■ レア・アンシエル

シャローム学園所属のヴァルキリー。

サブラとは旧知の仲でアルカにおいては希有な人間の鑑である。

■ ミーシャ・セデンブラッド

ガーランド・ハイスクールに所属するヴァルキリー。

タスクフォース420に在籍しロシア人を蛇蝎のように嫌う人間の屑である。

■ ゼニート

自由ヴォルクグラード軍の首領。

フレガータ学校占拠事件で殉職したタスクフォース563隊員の名誉回復を理由に武装蜂起を果たすが少なくとも人間の屑ではない。

■ マリア・パステルナーク

ヴォルクグラード人民学園所属のヴァルキリー。

ヴォルクグラード学園軍大佐にして元ヴォルクグラード人民学園生徒会長。

恐怖政治を行っていた人民生徒会を『アルカの春』で打倒した英雄だが、その正体は麻薬密売や人身売買で懐を肥やす人間の屑であった。

一九四三年の第二次ヴォルクグラード内戦で戦死。

■ ユーリ・パステルナーク

マリア・パステルナークの弟。

タスクフォース563に所属するスペツナズ隊員だったが現在の消息は不明。

■ アビー・カートライト

テロ組織ラミアーズのリーダーであったヴァルキリー。

一九四五年のラミアーズ戦争で戦死。

■ 倉木マツリ

テロ組織ラミアーズに所属していたヴァルキリー。

アビーの死後ラミアーズの残党を率いて行動するも一九四六年のトラック戦争で死亡。

■ ユライヤ・サンダーランド

ガーランド・ハイスクール所属のヴァルキリー。

タスクフォース420の指揮官だが捕虜虐殺の容疑により更迭されてしまう。

■ アンドレイ・ナザロフ

ヴォルクグラード人民学園のタスクフォース563に所属していたスペツナズ隊員。

一九四七年のフレガータ学校占拠事件で殉職。

■ セルゲイ・リブチェンコ

ヴォルクグラード人民学園のタスクフォース563に所属していたスペツナズ隊員。

一九四七年のフレガータ学校占拠事件で殉職。

■ ローマン・ウステイノフ

ヴォルクグラード人民学園のタスクフォース563に所属していたスペツナズ隊員。
一九四七年のフレガータ学校占拠事件で殉職。

■ ボリス・バリエフスキー

ヴォルクグラード人民学園のタスクフォース563に所属していたスペツナズ隊員。
一九四七年のフレガータ学校占拠事件で殉職。

■ ルスラン・アミルスキー

軍事顧問としてタスクフォース563と行動を共にしていたソ連本国の軍人。
一九四七年のフレガータ学校占拠事件で殉職。

用語

■ アポカリプス・ナウ

一八〇〇年代の末期、地球に到着した隕石によってもたらされた大災害と、それがきっかけになって始まり、その後十五年間続いた世界規模の戦争。

■ アルカ

アポカリプス・ナウ後の世界を事実上支配している巨大多国籍企業グレン&グレンダ社が考案した、学園同士が世界各国の代理戦争を行う場所。

日本の山形県を丸ごと接收、転用しており、かつての市や町の一つ一つに各国の代理勢力となる学園都市及び軍事施設が配置されている。

■ B F

アルカで代理戦争が行われる場所、通称バトルフィールドの略称。
毎回異なった勝利条件と敗北条件が設定される。

■ プロトタイプ

アルカ学園大戦で『学園』というコミュニティの根幹を成す戦闘用の人造人間。

常人の数倍の成長速度と寿命を有し、ほぼ全ての個体が強い戦闘衝動を持つようにプログラムされている。

■ ヴァルキリー

大量生産されるプロトタイプの中に少数存在する、かつて地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石と、それに含有されるマナ・エネルギーとの親和性を有した少女達。

液状化したマナ・エネルギーが固着して形成されるマナ・ローブを纏うことで戦車の装甲と火力、戦闘機の数と機動性を人間サイズで実現している。

背部ユニットを使つての飛行やマナ・フィールドと呼ばれる堅固な防御障壁の展開が可能だけでなく、個体によってはグレン&グレンダ社によってブラックボックス化された強力なマナ・エネルギー兵器を使用することができる。

■ タスクフォース

B Fで代理戦争を行うため学園軍から一時的に編成される部隊の総称。その規模は十名に満たないものから師団規模の大部隊まで多種多様である。

■ 民間軍事企業

各種軍事サービスを有償でクライアントに提供する新しいタイプの企業。アルカにおける代表的なものにはスピリットウルフ社がある。

■ ヴォルクグラード人民学園

アルカにおけるソビエト社会主義共和国連邦の代理勢力。学園都市はアルカ北西部の港町サカタグラード。

■ ガーランド・ハイスクール

アルカにおけるアメリカ合衆国の代理勢力。

学園都市はアルカ東部のテンドーシティ。

■ シュネーヴァルト学園

アルカにおけるドイツ連邦共和国の代理勢力。
学園都市はアルカ南東部のタカハタベルク。

■ シャローム学園

アルカにおけるイスラエルの代理勢力。
学園都市はアルカ西部のツルオカスタン・カモ自治区にある。
シャロームとはヘブライ語で『平和』を意味している。

■ パブリック・スクール・オブ・ブリタニカ

アルカにおけるグレートブリテン及び北アイルランド連合王国（英国）の代理勢力。
学園都市はアルカ北西の海上に浮かぶトビシマ・アイルランドにある。

■ ドラケンスバーグ学園

アルカにおける南アフリカ共和国の代理勢力。

学園都市はアルカ南東部のヤマノベア（旧名山辺町）。

■ トランシルヴァニア学園

アルカにおけるハンガリーの代理勢力。

学園都市はアルカ南東部のフェルニゲシュ・コシユテイ（旧名上山市）。

■ ハイスクール・エウレカ

アルカにおけるオーストラリアの代理勢力。

学園都市はアルカ北東部のオーイシア（旧名大石田町）。

■ 和州学園

アルカにおける日本の代理勢力。

学園都市はアルカ南東部のヨネザワシティ。

■ スピリットウルフ社

通称S W社。

エーリヒ・シュヴァンクマイエルが立ち上げた民間軍事企業。

アルカ最大の規模を誇り、イスラエルとの結託により絶対的な地位を築きつつある。

■ モサド

イスラエル諜報特務庁及びシャローム学園諜報特務庁。

情報収集だけでなく要人誘拐や暗殺にも長けており、一度ターゲットになればその魔の手から絶対に逃れることはできない。

■ サヤン

アルカ各校だけでなく世界中に潜伏しているモサドの協力者達。

■ 人民生徒会

かつてヴォルクグラード人民学園を支配していた組織。恐怖政治を行っていたが、『アルカの春』でマリア・パステルナークにより打倒された。

■ ロイヤリスト

人民生徒会以前の政治体制を支持するヴォルクグラード人民学園の生徒達。一九四三年の第二次ヴォルクグラード内戦後、同学園の実権を掌握している。

■ M A C T (マックテイー)

トランシルヴァニア軍事援助司令部。

S A C Sの侵攻に備え、貧弱なトランシルヴァニア学園の学園軍を支援、教育するため各校から集まった将兵で編成された組織。

指揮官はエーリヒ・シュヴァンクマイエルだったが現在は解散し、当時のメンバーの多くが彼の立ち上げたスピリットウルフ社に移籍している。

■ 第三十二大隊

表沙汰にできない任務を専門に遂行するシュネーヴァルト学園の非公式部隊。一度は解体されたがラミアーズに対抗するため後に再結成された。

■ S A C S (サーカス)

アルカ学園大戦に初めて出現した民間軍事企業。

第三十二大隊がラミアーズ壊滅後に名を変えたもので、一九四七年にクライアントからの依頼で『トランシルヴァニア戦争』を引き起こすが敗北し全滅した。

■ P S O B ー S A S

パブリック・スクール・オブ・ブリタニカの特殊部隊。

■ ラミアーズ

かつてアルカに存在した『死による生からの解放』を信奉するテロ組織。

一九四五年にリーダーのアビーが死亡し壊滅、倉木マツリが率いた残党も翌年のトラック戦争でドラケンスバーグ学園のタスクフォースに殲滅された。

■ X生徒会

シャローム学園の事実上の支配者。
三体のモノリスで構成されている。

■ アルカの春

一九四三年初頭、マリア・パステルナーク一派が圧制を敷く人民生徒会に対しクーデターを起こし、政権を奪取した事件。

第一次ヴォルクグラード内戦とも呼ばれる。

■ 第二次ヴォルクグラード内戦

一九四三年八月、シュネーヴァルト学園に支援されたヴォルクグラード人民学園旧体制派（ロイヤリスト）とマリア・パステルナーク率いる一派の間で行われた内戦。

ヴォルクグラード人民学園旧体制派が勝利し、マリアは死亡、その一派も壊滅した。

■ アゴネシア

東南アジアのどこかにあるとされる国。

カンボジアやラオス等を指しているが、詳細は不明である。

■ ショナイ平原

旧名庄内平野。

アルカ北西に位置している。

■ グリヤーズヌイ特別区

かつてクーデターと内戦によって母校を追われたヴォルクグラード人民学園の生徒達が潜伏していたサカタグラードの区画。

一九四三年八月にマリアの一派によって凄惨な虐殺が行われた地でもある。

■ ブラッド・シー

旧名日本海。

アルカの北西側に広がる海洋。

■ ルナ・マウンテン

旧名月山。

グレン&グレンダ社の直接管轄地域になっている。

■ ショー&ナイ・エアベース

旧名庄内空港。アルカ各校が共同管理している空港。

プロローグ

一九四八年十二月二十八日。

かつて山形県と呼ばれていた土地を流れる旧名最上川ことモガミ・リバーの上に広がる
澱んだ曇天は、まるで年の瀬を迎えてなお閉塞感と重苦しさに満ち溢れているこのどうし
ようもない世界そのものを如実に表しているかのようだった。

「鳥達が羨ましい」

冷たい風で頬を撫でられた少女はうつすらと雪を被った大地に佇みつつ越冬のためシベ
リアから極東の片隅に渡ってきた白鳥達が中洲周辺を揺蕩う姿を見て静かに呟く。

「すぐに戦争を忘れられるから……」

頭に赤い星の付いたウシヤンカを被るエレナ・ヴィレンスカヤが青い瞳に川を流れる白
鳥の姿を映していると、音を立てて吹いた風が今日に至るまでの五年間、心身共に傷付き
すぎた少女の白い吐息を流し消した。先端で結われたプラチナブロンドの髪も微震する。

「同志大佐……ユーリ君……私は決心しました」

冬風が地面と同じように雪化粧が施されたソ連製T-34／85中戦車の残骸内部を駆
け抜け、その出口にある拉げて捻じ曲がったハッチから耳障りな音を鳴らす。

「あまりにも残酷で理不尽なこの世界に対する」

エレナは薄茶色をした防寒服のポケットから取り出した一枚の写真に視線を落とす。

色のくすんだカラーフィルムには二人の少女——その内一人はエレナ——と学生服に身を包んだ一人の少年が映り、三人揃って屈託のない笑顔を浮かべている姿があった。

「反逆者になることを」

エレナは自分に言い聞かせるように口走った。

寒い冬を終わらせるための戦いがこれから始まるのだ。

第一章

一九四八年九月一日。

アラスカの米軍基地に亡命した新型戦闘機を巡る米国とソ連の軍事衝突がそのまま持ち込まれてしまった結果、アルカ始まって以来の大規模な激戦が陸海空で繰り広げられることとなったエルメンドルフ戦争は終息の兆しが全く見えないまま今なお続いていた。

「前世紀の終わり……」

泥沼化した地上戦が今日も行われているアルカ北西部のシヨナイ平原にグレン&グレンダ社のラジオ放送が流れる中、英語で罵詈雑言を撒き散らす女性兵士がヴォルクグラード学園軍のJSU・152重自走砲のキャタピラに巻き込まれ粉碎されていく。

「巨大隕石の落下と……」

本来ならばBFにおける国家間代理戦争の勝利条件や敗北条件を伝える役割を持つ大型モニターが上から半分綺麗に吹き飛んでしまっているその前で華奢な少女の肢体が枯れ木の折れるような音を立てて正視に耐えない無残な血塗れの肉塊へと変わった。

「それがきっかけになって始まった十五年間にも及ぶ世界規模の戦争が人類に歴史上類を見ない未曾有の被害をもたらしました」

無意味に響き渡るラジオ放送で鼓膜を叩かれつつ濃密な対空砲火を掻い潜って急降下したガーランド・ハイスクールのヴァルキリー達はその途中で仲間を失いながらも他校から

アニマルハンターと呼ばれるソ連製重自走砲へ肉薄、装甲の比較的薄い車体上面や白ペンキでスローガンの描かれた側面に向けて肩に担いだM1バズーカの連撃を放つ。

「混乱はグレン&グレンダ社によって収められました」

大爆発を起こした車体から舞い上がった戦車兵がバラバラになって黒ずんだ地面に落ちるよりも早く濃緑色のマナ・ローブを纏うヴァルキリー達は右上方から七・六二ミリトカレフ弾の掃射を浴びた。口々にファック、サノバビッチ、マザーファッカーと聞くに堪えない言葉を漏らした彼女らは六十ミリロケット弾を発射するという役割を終えた携帯式対戦車火器を躊躇なく投げ捨て、得物をM3グリースガンやフォアグリップが無理矢理取り付けられたM1919重機関銃に切り替えて応戦する。

「そして同社は今後一切、人々が争わずに済む世界を作ろうと考えます」

右上方から青い粒子の尾を引いて降下してきたヴォルクグラード学園軍のヴァルキリーは一旦とあるガーランド・ハイスクールのヴァルキリーの眼前を急降下で素通りしたあと、彼女の左下から反転上昇し距離を詰めた。そしてお互いがそれぞれ手にしたマチェットとスペツナズナイフが接触して眩く激しい火花が散る。

「それが戦闘用の人造人間『プロトタイプ』を教育し」

およそ二秒半の鏖迫り合いを経て、頭のバンダナに煙草の箱を挟み込んだガーランド・ハイスクールのヴァルキリーは無線機のインカム越しにとある声を聞く。戦乙女は相手の腹部を引き締まった右足で思い切り蹴り飛ばして距離を取った。

「世界各国の代理勢力である『学園』に所属させ」

その直後——対地攻撃という本業を終えたガーランド・ハイスクールのP・47サンダーボルト戦闘爆撃機からの猛烈な機銃掃射によってロシア製ヴァルキリーは瞬時に蜂の巣へと変えられ、黒ずんだ穴だらけの無残な姿で地面に吸い込まれていった。

「アルカという永久戦争地帯でそれぞれの母国の代わりに戦わせるシステムなのです」

不本意ながら獲物を奪われてしまったものの親指を立てて感謝の意を表したヴァルキリーに対しヤーボと呼ばれ恐れられる戦闘爆撃機は両翼を振りその礼に応じるが、左翼が元の位置に戻った瞬間、高速で駆け抜けた赤い輝きに貫かれて爆散した。

「そして今や民族対立、資源の利権争いといった国家間の問題は全てアルカにおける代理戦争で処理され、人類にとって永遠に過去のものとなりました」

眼前に広がった光景が理解できず「えっ」と思わず素っ頓狂な声を上げてしまったガーランド・ハイスクールのヴァルキリーの右手が木っ端微塵になって吹き飛ぶ。

「あれ、手……」

顔に赤黒い液体を浴びた仲間達が皆一様に茫然とした直後、七・六二ミリ弾が右肘から先を失ったヴァルキリーの胸を四連続で貫き、彼女の口から血を大量に吐き出させた。

「やっぱり茶番劇の舞台でこそ！」

恐怖と驚愕によって大きく見開かれたヴァルキリー達の目が、先程千切れて放り出された仲間の右腕をキャッチするなり左回転しつつ投げ捨てる味方ではない同族の姿を捉え、

そいつが眼鏡の奥にある爬虫類じみた縦スリットの赤い瞳で自分らを見つけるなり興奮の度合いを加速度的に高めていく絶望的光景を視認する。

「全力で踊るに相応しい！」

シヨナイ平原上空に馳せ参じた百八十センチを超える長身のヴァルキリーはショートカットの金髪を揺らして後方に展開する部下達が持つ四連装ロケットランチャーから撃ち出されたロケット弾をなぞるようにして半球形の右回転——ロールを打つ。

「テウルギスト！？ スピリットウルフ社か！」

「戦争の犬共が！」

「よくそう言われるけど、これは完全にビジネスでやっていることさ！」

ノエルは自分の前に出たロケット弾を手にした自動小銃のセミオート射撃で爆発させ、

「私達はプロとして顧客の要望に応え、他にはない無上の満足を与える！」

回避が間に合わず炸裂と閃光に巻き込まれた数体のヴァルキリーを絶命に追い込む。

「どんな学園にも安定が必要なのださ」

間一髪でロケット弾の爆発から逃れたヴァルキリー達は煤塗れになって黒煙から飛び出すなり突如現れたヴォルクグラード学園軍の恐るべき援軍に対して銃弾を浴びせる。

「安定なくして国家の代理人という役割は果たせないからね！」

しかし彼女達の銃口から撃ち出された弾丸はジグザグの機動で空を駆けるノエルの肢体を一発たりとも捉えることができず、ただ一刻後に残る赤い粒子の輝きを貫くに留まった。

「安定の実現のためには訓練された強い学園軍が不確定要素に対する自浄作用を持つべきなんだ。それが代理戦争の勝利に結び付き、母体国家とその国民の幸福にも繋がる」

現在ヴォルクグラード人民学園と契約している『業界最大手』の民間軍事企業SW社に身を置くヴァルキリーは自分に放たれ続ける弾雨から余裕綽々で逃れるなり左手のイスラエル製自動小銃で左上の敵を撃ち抜くと、そのまま右手に携えた同国製ウージー短機関銃を連射しつつ右旋回して右上から迫っていた三体の敵を矢継ぎ早に撃破した。

「アルカでは今までの戦争の常識は通用しない！」

四十発の九ミリ弾を放ち終えたウージー短機関銃を投げ捨てたノエルは更に一回転して左下から迫るヴァルキリーをガリル自動小銃で撃墜し、銃口の先で手足に続いて胸部を撃ち抜かれ絶命した敵から放り出されたPPSh-41短機関銃を手隙な右手で掴んだ。

「イレギュラーな武装勢力を極めて短時間の内に交渉の場に連れ出すこともできない！」

続いて空を踊り続けるノエルは右上から自分を狙っていたヴァルキリーに奪ってからまだ七秒と経過していないソ連製短機関銃からの猛射を浴びせる。

「アルカ各校の学園軍に対する高度な専門技術と部外秘軍事顧問提供！」

仲間達を殺された怒りに身を任せてノエルに向けBAR自動小銃を連射していたヴァルキリーの右腕が殺到してきた七・六ミリトカレフ弾によって付け根から鮮血と共に切り離され、断面から生暖かい飛沫をぶちまけて四散した。直後に悲鳴を上げたヴァルキリー本人も頭部をガリル自動小銃からの弾丸で吹き飛ばされ絶命する。

「同、適切な軍事および戦略的アドバイスの提供！」

「減らず口を叩いて！」

実際のところ自分でもあまりよく理解していない文言を大声で口にしながら縦横無尽に飛び回り死と破壊を振り撒くノエルに対し、まだ生き残っているガーランド・ハイスクルのヴァルキリーが虎の子として温存していたM1バズーカを後先構わずぶっ放す。

「同、陸海空の全戦争局面で現時点における……えーっと何だっけ……まあいいや次！」

背部飛行ユニットから左右に伸びる後退翼に狼を模したSW社のロゴを描くノエルは縦方向に回転して易々と六十ミリロケット弾を回避し右下にいるヴァルキリーを撃つ。脳漿と頭蓋骨を四散させて少女の頭が吹き飛ぶ様を目の当たりにした彼女は続いて頭を失った戦乙女の右腕を狙おうとするが、黒いオープンフィンガーグローブから覗く人差し指がトリガーを引く前に左からの銃弾を浴びた。

「同、国軍に対する武器とその土台選択についてのアドバイスの提供！」

反射的に真紅のマナ・フィールドを展開しM3グリースガンからの弾丸を防いでなおも話し続けるノエルにまた別のヴァルキリーが肉薄した。ノエルと同じ飛行ユニットを背負うヴァルキリーは彼女が放出したダミーバルーンを易々と切り裂いて接近、左手で右下から左上にかけて鉞を振るいPPSh-41短機関銃の銃身を両断する。

「同、守秘義務・プロ意識・専心に基づく100%非政治的な業務の提供！」

ヴァルキリーは続いて左下から右上への斬撃を繰り返さんとするが、数年前はポニーテ

ールだった髪を今は短く切り詰めているノエルが右手に展開した分厚い光の障壁でそれを防ぎ、彼女から強烈な左膝蹴りを鳩尾に叩き込まれてしまう方が遥かに早かった。

「それらがアルカ最高にして最大の民間軍事企業、S W社の社是であり！」

吐血——肺から一気に酸素を奪われたヴァルキリーは思わず口を開く。

「君達を殺す者の正体さ！」

すぐに銃口が薄桃色の舌を押し潰して少女の口内に突っ込まれた。

そして微笑んだノエルは躊躇なくガリル自動小銃のトリガーを引いた。



「真実が常に最善であるとは限らない」

「この世界は好都合な嘘と楽観主義によって成り立っている」

アルカ北西、ツルオカスタン・カモ自治区の地下深くに存在する巨大な議場で『01』

『02』、『03』の数字とダビデの星がそれぞれ記されたシャローム学園の真の支配者

たる漆黒のモノリス達が深い意味を幾つも内包した言葉を交えていた。

「しかし戦線から遠く離れた場所に身を置き続けるグレン&グレンダ社にとっての現実は、

今やその好都合な嘘と楽観主義に取って代わられています」

生命の息吹が一切感じられない無機質な空間に立つモノリス達こそX生徒会——アポカ

リップス・ナウ後の世界を事実上統治している巨大多国籍企業の人間ですらその存在を認知していない、アルカにおけるユダヤ人達のブレイン——だった。

「エーリヒ・シュヴァンクマイエルによる真実の暴露を受けた後でもグレン&グレンダ社は現実から目を背けている」

「これは我々が勢力を拡大する上で大きなプラスとなるだろう」

01と02のモノリスがそれぞれ電子加工された男の声を発する。

「自由ヴォルクグラード軍は既に行動を開始しています」

それらに対して返答したモノリスは女声の03だった。

「全ては我々X生徒会の計画通りです」



「皆殺しの雄叫びを上げ、戦いの犬を解き放て」

シヨナイ平原での戦端が開かれてからおよそ一時間が経過した頃、ヴォルクグラード人民学園と契約して同地に展開するS W社は地上でも行動を開始した。

「ハイ、アイムギヤビン」

「——ッ？」

B Fの後方から心配そうに芳しくない戦況を見守っていたガーランド・ハイスクールの

ヴァルキリーが全く聞き覚えのない野太い声を耳にして振り向いた瞬間、イスラエル製自動小銃の木製ストックがまだ幼さの残る彼女の顔面に叩き付けられた。

「何よ……何なのよ……」

思わず尻餅をついてしまった戦乙女は口からは折れた前歯を、鼻からは赤い滴を地面に落としながら激痛に耐えつつ何とか起き上がろうとする。そんな彼女の前にガリル自動小銃を構えて仁王立ちしていたのはドーランで顔と手を真っ黒に塗ったSW社の兵士だった。

「前進！」

少女の首から上を脳漿と頭蓋骨の炸裂に変えた兵士が右手を上げて叫ぶ。するとガーランド・ハイスクールの戦線後方のあちこちから南アフリカ共和国製のヌートリア戦闘服とチェストリグ（注1）を纏い、彼と同じように袖や襟から覗く肌を戦闘服と同色のブーニーハットの下にある顔も含めて全て黒塗りにしたSW社の歩兵部隊が続々と姿を現し、意表を突かれたアメリカ合衆国の代理人に対し恐るべき破壊と殺戮の限りを尽くし始める。

「突撃！」

「ヤンキーをブラッド・シーに叩き込め！」

続いて、今度はSW社によって徹底的な強化と再訓練を施されたヴォルクグラード学園軍の機甲部隊が指揮系統に混乱を来たす前線を次々に突破していく。

「こいつら何時ものイワンじゃないぞ!？」

戦力が枯渇した正規軍の穴埋めとしてシヨナイ平原に展開中のタスクフォース420に

配属されているアゴネシア人傭兵達は挟撃の憂き目に遭いながらも必死で応戦した。

「撃て！ 撃て！」

悲鳴じみた声を上げて浅く雑な塹壕から死に物狂いで撃ちまくるアゴネシア人傭兵達にとつてのヴォルクグラード学園軍とは少数の戦車に支援された新兵による人海戦術が出来て関の山の連中であり、今回のような奇襲など逆立ちしても出来る筈がないと誰もが考えていた。だから鹵獲品の対戦車砲一門支給されず、吸着地雷や靴下爆弾、M1バズーカだけで装甲兵力の代替品扱いされている彼らはやがて目の前の現実に半ば恐慌状態に陥った。

「くたばれ！」

どこの馬の骨とも知れない一人のアゴネシア人傭兵が塹壕から上半身を出してM1バズーカを放つがT・34／85中戦車の側面装甲に難なく弾かれてしまう。直後、彼は塹壕前面の空莖莖や人骨が混ざり込む土の盛り上がりごと砲撃で吹き飛ばされた。

「もう嫌だ！ 話が違うじゃねえか！」

両足を失ったまま奇妙に地面に直立して獣のような叫び声を上げ、その数秒後に絶命する仲間を見た他の傭兵達が相次いで武器を捨て逃走し始める。

「土人共逃げるな！ 戦え！」

「クソガキめ！」

「死ね！」

黒人奴隷同然の運搬方法でアルカにやってきた傭兵達は自分の息子程の外見をしている

ベレー帽を被った軍事顧問を問答無用で射殺すると一目散に走り出した。

「敵戦線の崩壊を確認。空から水撒きバケツで掃除してくれ」

醜態極まりない味方殺しの一部始終を生い茂る草木の間から見守っていたS W社の偵察班がすぐに上空を往くB f 1 0 8 軽攻撃機へ連絡する。

「了解」

アフリカーンス語で応じたドラケンスバーグ学園出身のパイロットは機体にヴォルクグラード学園空軍所属を表す赤い星が描かれた機体を降下させ、両翼下に吊り下げられたソ連製ガンポッド——四銃身七・六二ミリガトリングガン二基と四銃身十二・七ミリガトリングガン一基を搭載している——で射線上にいた全ての存在を掃射した。

「皆殺しにしろ！」

「いいぞ！ どんどん殺れ！」

パイロットは猛烈な弾雨によって人体が次々に損壊させられていく地獄絵図を目の当たりにしたS W社の兵士達の歓声に応えんと再攻撃に移ろうとするが、操縦桿を左に倒す寸前にガーランド・ハイスクルのヴァルキリーから撃ち出されたM 1 バズーカの六十ミリロケット弾によって人狩り専用機ごと空中で四散した。

「人の本質は……！」

戦場に馳せ参じたミーシャ・セデンブラッドは新しいロケット弾をボブ・バーンズが使っていた自作ラッパからその名を取られた対戦車火器に装填すると右肩にその発射筒を乗

せ、左手に携えた鹵獲品の P P S h - 4 1 短機関銃で地上にいる敵を掃射していく。

「悪よ！」

ミーシャの声には上官であるユライヤ・サンダーランドが捕虜虐殺の疑いという理不尽極まりない滅茶苦茶な理由で更迭された現実に対する怒りが満ちていた。

「戦争の犬と笑って手を組めるから、平気で子供だって殺せるんだ！」

彼女にとってロシア人とはフレガータ学校占拠事件で子供達ごとテロリストを皆殺しにした上、何の大義もなく金のみで動く S W 社と手を組む生きるに値しない正真正銘の酸素泥棒集団だった。少なくともグレン & グレンダ社はそう言っているし、彼女もまた同社こそがこの世界において信用可能な唯一無二の存在であると強く信じている。

「情報弱者が！」

ミーシャと同じ高度になった S W 社のヴァルキリーはライオットシールドを左手に持ちつつ、それで身を隠しながら右手を前に出し携えたウージー短機関銃を撃とうとする。

「うわっ！」

しかしトリガーを引く直前にミーシャの M 1 バズーカから撃ち出された六十ミリロケット弾が飛来し、彼女は思わず透明なポリカーボネート製の盾を前に出してしまう。反動で左手が外側に広がるのと同時に白煙を残すロケット弾は反れて自分の近くにいた別のヴァルキリーの背部飛行ユニットに吸い込まれ、爆発の閃光で空を照らした。

「最前線の病院に突然送り込まれた医師のような気持ちで戦争をやってはいけないよ」

すぐに零距离からの連射で最初の目標も殺害したミーシャの鼓膜を楽しげな声が打つ。

「——ッ」

ミーシャの視界端に通常のものとは違う赤いマナ・エネルギー粒子の光が映った。

「事実私は」

縦のS字機動でノエル・フォルテンマイヤーが迫ってくる。

「速い——ッ！」

ミーシャは片手で持ったPPSh・41短機関銃の銃口で迫り来るヴァルキリーを追うが、放たれる弾丸はただ空しくコルダイト火薬臭い空間を掠めていくに留まった。

「患者と一定の距離を置いて手術を行う外科医のように人を殺している」

目の前にアルカ最凶のヴァルキリーがいるという事実気付いたミーシャが弾切れを起こしたソ連製短機関銃を投げ捨てた瞬間、上体全てを叩き付けるかのような左フックが彼女の右頬を捉えた。続いて右の回し蹴りがミーシャの左側頭部を痛打する。

「逃げろ！」

同じ釜の飯を食べ続けてきた仲間の危機を目の当たりにして慌てて駆け付けたヴァルキリーが地面に叩き落されて咳き込むミーシャを援護するが、

「はいいじゃまじゃまじゃま——！」

彼女が顔を上げるや否やそのヴァルキリーは全身を七・六ミリ弾で貫かれ四散した。生暖かい臓物や血で全身を汚したミーシャは激しく嘔吐する。彼女の周囲にはあちこち

に黒い血の染みが点在し、すぐ横にも体に長い紐のようなもの——腹から飛び出た薄桃色の腸が巻き付いた死体が転がっていた。

「殺される……殺される……」

ミーシャは考えるよりも早く黒焦げになった死体の傍に身を横たえ、できるだけ胸を動かさないようにした。仲間の死体を利用する後ろめたさを生への渴望が上回ったのだ。

「やっぱり生きているじゃないかー」

とはいえ現実とは非情であり、すぐにミーシャは上下する胸をノエルの軍用ブーツで踏み付けられ地面をのたうち回ることになった。そして彼女は眼前に佇む、マナ・ローブの露出部からうっすら浮いた腹筋を覗かせる長身の戦乙女を見て恐怖する。

「嘘はいけないにゃーん」

ミーシャの口に今日だけで三桁近い命を奪ったガリル自動小銃の銃口が押し付けられる。

「助け……助け……」

腰砕けになったヴァルキリーの股間から生暖かい液体が漏れ始めた。

「あんまり殺し過ぎても良くないかなあ。敵あつての私達だし」

しかし防錆加工が施されたトリガーが引かれることはなかった。短い金髪を返り血で汚したノエルが肉片こびり付く銃口を上げ、安全装置を掛けてミーシャに背を向けたからだ。「こ、殺しなさいよ……!」

首の皮一枚で命拾いしたミーシャは何とか立ち上がろうとするが無理だった。今まで一

度たりとも味わったことのない圧倒的な恐怖で完全に腰が抜けてしまっていたのだ。

「殺しなさいよ！ 殺せ！」

ミーシャは血の混じった唾を撒き散らして叫ぶが誰も相手にしない。

「あいつなんて言ってるんだ？」

「無知と貧困は人類の大罪だってよ」

「いいや違うな。きっと『木を大切にしよう』と訴えているんだろう」

彼女の周囲ではS W社の社員達が東へ向かって歩いていたが、その中の誰一人として死に損なったヴァルキリーの頭をガリル自動小銃で撃ち抜かなかつたし、背後から後ろ髪を掴んで白い喉をナイフで切り裂きもしなかつた。

「殺しなさいったら……」

尻に自分が垂れ流した尿の冷たさを感じながらミーシャは思った。

自分は自分が憎悪する連中にとって、殺すにも値しない存在なのだ。

注1 前掛け式の予備マガジン入れ。



ソ連の代理勢力ヴォルクグラード人民学園が校舎を構えるアルカ北西部の港町サカタグ

ラードは今や学園都市ではなく要塞都市の趣が強い有様になっていた。大小様々な弾痕が穿たれた建物の屋上にはZPU・4対空機関砲やドイツ製の二段推進式地対空ミサイルが設置され、街のあちこちにチェコのハリネズミと呼ばれる対戦車障害物や空挺部隊の降下を防ぐため縦に突き立てられた鉄道レールの異形がある。

「ここモスクワの町中では市民が配給に長蛇の列を作っています」

時刻が午前十二時を回った頃、旧ロイヤリストの生徒達が慌ただしく行き交うヴォルクグラード人民学園の生徒会オフィスに校内放送のラジオが流れ始めた。

「次のニュースです。ニューヨークでは失業者が街に溢れ……」

一人の生徒会役員が連日続く暗いニュースに辟易して日本製ラジオの周波数を変えようと試みるが、その一方で部長然としてオフィスの最奥部の机に収まる赤髪のヴァルキリーは顔色一つ変えずに次々と書類にサインを記していく。

「こいつは除去しちゃっていいわよ」

「宜しいのですか？ 彼女も旧ロイヤリストですが……」

かつてP S O B・S A SのC中隊長としてアルカ各地を転戦した英国訛りのロシア語を話す少女に書類を渡した男子生徒は彼女の即答を受けて不安げな表情を浮かべた。

「マイハニー……じゃなくてエーリヒ・シュヴァンクマイエルはB Fでの代理戦争を国家同士の諸問題解決に用いる今まで通りの方法を維持したままでラミアーズやS A C Sのような不確定要素が絶対に発生しない清く正しいアルカを作ろうとしているわ」

第一線を退いてなお引き締まった肢体を崩さないスーツ姿のキャロライン・ダークホームは青い瞳を男子生徒に向けたまま右手で書類へのサインを続ける。

「だからこそ私はSW社からこの学園の中枢に派遣されてこのようにイレギュラーなテロリストや武装勢力の芽を事前に摘み取る尊い仕事をしているの」

事実上の死刑執行書にサインを済ませたキャロラインは有無を言わず男子生徒を次の仕事に向かわせて新たな書類を手に取ろうとしたが、人差し指が紙面まであと数センチというところで電話の着信ベルを耳にした。

「もしもし？」

「キャロ？ 私だよ」

「アルカに輝く一等星にして偉大なる無敵のヴァルキリー！ プロトタイプ之母たる人類の太陽であり慈愛と信頼に溢れた永遠の胸を持つ我らがノエル・フォルテンマイヤー！」
電話口からの声で鼓膜を叩かれたキャロラインは喜びと興奮のあまり飛び上がりそうになっってしまったが、瞬時にその感情を理性で押さえ込んだ。

「勿論把握してるわ」

エーリヒとほぼ同等の敬愛を寄せるノエル・フォルテンマイヤーからの質問に答えつつキャロラインは立ち上がり、防弾ガラスで作られた窓の外に体を向ける。

「エレナ・ヴェレンスカヤはイレギュラー監視リストの上位に入っていたもの」

キャロラインは窓外に見える、凄惨なリンチの末に殺害され今は黒焦げの状態で街路樹

に吊るされているガーランド・ハイスクールのヴァルキリーを見やった。

「でも彼女はもう」

多くの狂気と地獄を目の当たりにしてきた見てきた瞳は次に、今や地面に横たわり下品な落書きだらけになったマリア・パステルナークの銅像へと移った。

「過去の人よ」



「エレナせんせい、あの人だーれ？」

一緒に遊んでいた子供の一人が指差した先で車から降りて来る人物を目にして、それまで柔和さを崩さなかったエレナ・ヴィレンスカヤの表情が一気に険しくなった。

「みんなを連れて中に戻っていなさい」

アルカの片隅にあるザ・オーの孤児院で過ごす毎日の中で自分がヴァルキリーであるという過去を忘れつつあった少女は腰を落としてここにしか居場所がないアゴネシア人の子供と同じ視線になり、何とか表情を柔らかいものに戻すと優しくその頭を撫でる。

「やあ。空飛ぶスパゲッティ・モンスター教の教えに従った英国カーレスリング協会の強い要請を受けてここにやってきたよ」

「テウルギストが一体何の用だ？」

子供達が孤児院の中に戻ったことを確認したエレナに招かれざる客——ノエル・フォルテンマイヤーは悪友とも言えるヴァルキリー特製のジョークを送ったが、プラチナブロンドの髪を揺らす少女はそれを完全無視してテウルギストに鋭い眼光を浴びせる。

「いやいや。喧嘩をしに来たわけじゃないんだ」

「私も旧交を温める気はないぞ」

アルカに多額の出資を行った資産家の娘として人為的に産み出され、プロトタイプの中では初となるマナ・エネルギーとの親和性を期せずして有していたことで世界最初のヴァルキリーとなったノエルと、テウルギストと呼ばれ瞬く間にアルカ学園大戦という食物連鎖の頂点に立った存在を自分達でも作り出そうとした各国が湯水の如く資金を投入するも結局『規格落ち』にしかならなかった第一世代ヴァルキリーの生き残りであるエレナはある意味姉妹という仲ではあったが、お互いに相容れない存在としてこのアルカで望まれぬ生を過ごしてきた。BFで相見えた回数は両手でも数えきれない。

「私達と一緒に働く気はないかと思っただけ。サカタグラードやホテル・ブラボーで戦った君の能力をここで腐らせておくのは惜しい」

ノエルは自分に拳銃を向けてきたエレナにSW社のパンフレットを差し出す。

「給料は本国の兵士の五倍、生命保険と医療保護は標準待遇」

専門のデザイナーが写真の配置や文章のレイアウトを考え、本職の印刷所が刷ったであろうしつかりとした作りの冊子には『我々はグレン&グレンダ社のパートナーとして、農

業・工業・技術開発等をビジネスとする企業に助言と支援を行って「います」と代理勢力としてアルカに学園を持つ国全ての言葉で書かれている。

「強調したいのは私達が単なる武装集団やミリタリー芸人ではなくその道のプロであるということさ。私達は長い間アルカで戦い、アルカの戦争の歴史で多くを体験している。そのことがクライアントへの高クオリティなサービス提供に繋がる」

組み合わせた手首をくねらせ左足を後ろに折ったノエルは聞いてもいないのに語り出す。「ドロップアウトした君は知らないだろうけど去年の冬、アルカにおけるプロトタイプの戦争ビジネス活発化を危惧したグレン&グレンダ社は精鋭部隊の解散を各校に要求してね。勿論シュネーヴァルト学園のタスクフォース609も例外ではなく解隊を強いられたけど、所属していた生徒達はその直後にエリー共々地下へと潜った。そして今年の春、将来私と子供を作ることになる男の子は潜伏先の南アフリカ共和国でSW社を設立・登記した」

「その社員は……」

「勿論タスクフォース609の元隊員達だよ。中には旧ヴォルクグラードのロイヤリストやMACT組もいるけどね」

爬虫類じみた異形の瞳を持つ少女は特に意味もなくエレナにウィンクを送る。

「しかし、この時点ではまだSW社は単なる警備会社のようなものでしかなかった。油になったのはエルメンドルフ戦争さ。エリーはユダヤ人とイスラエルの協力を得てこの戦争の模様を全世界にテレビ中継させ——つまり火を着けてそれまでアルカの外の人々が知っ

ていたものとは異なる、学園大戦の凄惨にして狂気じみた実態を明らかにしてしまった」

当時のことを思い出しているのか、金髪の少女は楽しそうに勢いを付けて一回転した。

「こうしてグレン&グレンダ社は世界中の『良識』から袋叩きの憂き目に遭った」

「そこに手を差し伸べる形でエーリヒ・シュヴァンクマイエルがSW社を使った代理戦争の更なる外注化を提案した。そうだろうか？」

「さっすがエレナあ！ ご明察！」

ノエルは自分の妹とも言える少女に握手を求めるが、求められた当人は完璧なタイミングで後方にステップを踏み明確にそれを拒絶した。

「それでまあ、将来的にはあるけど今後のアルカ学園大戦における戦争は全て各学園の卒業生で構成された私達SW社の社員によって肩代わりされることになった。グレン&グレンダ社も溺れて藁を掴むようになるとは堕ちたものだよ」

「いくらお前達と言えど僅か数ヶ月でグレン&グレンダ社から主導権を奪うことなど不可能だ。どういう理由でイスラエルがお前達に協力しているかはわからないが……」

エレナは刺すような視線を眼前の人物に浴びせながら続ける。

「自分達の目的を達成するためならユダヤ人に利用されることも厭わないというわけか」

「それはお互い様だよ。当然SW社との結託はイスラエルにも大きな旨味があるからね」

「だろうな。お前達のことだ。そこまで計算してのことだろう」

エレナは鍵をかけて中にいなさいという託を破って物陰から不安そうに自分の姿を伺う

子供達を見やる。その表情は戦乙女から心優しい母親のそれへと戻っていた。

「悪いんだが断らせてもらおう。フレガータ学校占拠事件で私の戦争は終わったんだ。みんなあそこで死んでしまった。私も含めて……今はもう余生のようなものだ」

「そっか……」

ノエルも子供達を見て彼らに手を振りつつ少し残念そうに言い、

「でも無理強いはできないし、したくもない」

ザ・オーの孤児院へ背を向けて今いる場所から足早に立ち去ろうとする。

「テウルギスト！」

「んー？」

車へ向かっていくノエルは自分を呼び止めた妹同然の少女に振り向く。

「こんなことを言うのは変かもしれないが、今日は話せて嬉しかった」

少し気まずそうに言ったエレナに対し、ノエルは心から嬉しそうな表情を向ける。

「それが聞けただけでも、今日ここに無理して足を運んだ甲斐があったよ」



両翼にシャローム学園空軍所属を表すダビデの星が描かれた二機のP・51Dムスタング戦闘機に守られて空を行くエル・アル航空——このイスラエルの航空会社による恩恵に

預かれるようになったことで、S W社は前金が振り込まれてから僅か一時間後には自社の兵士をアルカのどこにでも展開できるようになった——のD C・3輸送機内で書類に目を通していたエーリヒはその中身を一通り確認し終わると傍らの消臭スプレーを手に取った。

「あーもう……」

魔女の大釜と化したシヨナイ平原から直行してきたせいで死臭や血の匂いを全身にこびり付けているS W社の最高責任者が事あるごとに日本製消臭スプレーを体に浴びせていたため、今や機内には噎せ返るようなミントの香りが充満している。

「B Fでは勝ちたいけどお金は払いたくない。全く矛盾してるよ」

目下エーリヒの悩みは昨年、S A C Sによってアルカを追い出されたものの今年になってようやく校舎再建を果たせたルーマニアとブルガリアの学園との交渉だった。

「四千万ドル!? そんな金額はともお支払いできません……」

ヌートリア戦闘服から皺一つないスーツに着替えたエーリヒは今日三箱目のカフェイン錠剤を噛み砕きながらブルガリアの学園の関係者が漏らした言葉を思い出し頭痛を覚える。

「とはいえ私達は二つの学園に楔を打ち込めた」

エーリヒの向かい側に腰掛けた金髪の少女が口を開く。

「B Fでは勝ちたいけど大金は払えない。だからS W社は無料で契約する見返りとして、今回のようにその学園の上層部に社員を少なからず送り込む。イレギュラーの目を摘み取るためにね。そうやって私達はあちこちに根を張り勢力を拡大していくし、私達と契約し

ないと国際社会の中で立ち行かない学園はそれでも縋るしかない」

ザ・オーでのスカウト活動が無駄足で終えたノエル・フォルテンマイヤーの言う通り、SW社はクライアントが到底支払えない額の報酬を要求した上で救済処置を提案し彼らを依存させるように仕向けることが多い。極めて下衆な方法ではあるが、人の良心や性善説を前提条件にできない世界の深淵では他に有効な手段がなかった。

「まあね……」

下手をすると家族よりも深く長い付き合いのある少女に肯定の頷きを返したエーリヒは突然の疲労感を覚えて眉間に手を当てる。

エーリヒは一九四三年以来ずっと、誰に勝つわけでも誰と戦うわけでもなくストイックかつ徹底的に『自分の戦争』を戦い続けている。彼にとってのルールとは自分であり、やると決めた以上は何を言われようが、どう思われようが、何をされようが完遂するのがエーリヒ・シュヴァンクマイエルという純粋な人間だった。とはいえBFや拠点同士の距離が極めて近いアルカ故の多忙は少なからず応えているようだった。

「エーリ、着くまで暇だし『マイルハイクラブ』しようよ」

「えっ何それ……」

「ざっくり言うると飛行機の中で、えっち」

「うえ！？」

唐突にシートベルトを外して席を立ったノエルは肉感的で長い両足を広げてエーリヒに

覆い被さり、その耳元に唇を寄せて甘い音色で囁く。

「ええええ!?!」

「にやはは」

学生服に身を包むノエルは肉食獣から逃げる小動物宜しく距離を取ろうとする童貞少年の後ろ首に両手を回し、キスした上でその女性的な白い頬と自分の頬を擦り合わせる。

「は、離してよ!」

「大人しく食べられるにゃーん」

加速度的な勢いでエーリヒの顔は茹で上がっていった。

「そういうことは結婚した後には……」

「良いではないかあエーリのいけずう!」

不純異性交遊への道を猛スピードで突き進む二人から少し離れた位置にある機内電話が助け船を出すかの如く騒々しい響きを発したのはその時だ。

「ちよつとごめん」

瞬時に奥手な童貞坊やからアルカに君臨するプロトタイプのパワーへと表情を変えたエーリヒは冷淡な動作と口調でノエルを引き離して立ち上がり受話器を掴む。

「進路を変えてください。サカタグラードへ戻ります」

即決し流暢なヘブライ語で手短かに要件を機長へと伝えたエーリヒは席へ戻る。そして足と腕を組み、人差し指で何度も上腕部を叩き始めた。

「今のエリーをマリア・パステルナークが見たら立派になったって喜ぶだろうね」

「彼女は関係ないよ」

ノエルは素っ気ない返事をした少年が喜びの表情を浮かべた一瞬を見逃さなかった。



S W社の旗とイスラエル国旗が揃って潮風に靡き、砲塔上のリングにK P V重機関銃及びD S h K 3 8重機関銃を増設した三台のM 8グレイハウンド軽装甲車が周囲を常時警戒しているサンキョ・デポは今、アルカ学園大戦という巨大な台風の目となっている。

「待ちくたびれたぜ」

ドラケンスバーグ学園出身の兵士がアルカ誕生以前には山居倉庫と呼ばれ、一九四四年の第三次ヴォルクグラード内戦で放棄された後はS W社の拠点として使われている物資集積所跡地に着陸したヘリから補給品を運び出していく。次々に運び出される真新しい弾薬箱や食料ボックスには例外なくヘブライ語の文字が刻まれていた。

「おかえりなさい」

ノエルを伴って自分達の仮住まいへと戻ったエーリヒを副官が出迎える。

「ただいま。S A D M（注1）は見つかった？」

「いいえ」

エーリヒと副官はクライアントから提供された拠点内を足早に歩きながら話し始めた。

「グレン&グレンダ社の調査部が協力を拒否しているものでして」

「あそこは跳ねっ返りばかりだからね」

「それも相当の……ですよ」

第二次ヴォルクグラード内戦でエーリヒから知己を得た元ヴォルクグラード人民学園所属のロシア系プロトタイプである副官は辟易の表情を浮かべる。

「長い物には巻かれてもらいませんと困ります」

グレン&グレンダ社の全てがSW社に協力的であるわけではない。自分達が生き残るためにはSW社と積極的に協力し合っていく必要があると考えている良識派が存在する一方、自分達こそが世界を支配する唯一の存在であると頑なに考える強硬派もまた存在する。

「ところでさっき電話をくれた『新しい問題』って？」

「六時間前です。自由ヴォルクグラード軍を名乗る武装勢力がルナ・マウンテンにあるグレン&グレンダ社管轄の矯正収容所を占拠しました。人質は五十二名。社員の家族もいたのでそのうち半数は女性や子供です」

「グレン&グレンダ社とヴォルクグラード人民学園はなんと？」

「SW社に全権を委ねるとのことです」

「体良く全て押し付けたわけだね」

「いつものことですよ。ゼニートと名乗る自由ヴォルクグラード軍のリーダーは社長との

会見を求めています」

「社長って呼ばないでよ」

「わかりました、社長」

副官の言葉を聞いて溜め息を漏らしつつ、アルブレヒト・ヴァレンシュタインの現代における後継者は急ごしらえの会議室の椅子に腰掛ける。

「映像を」

エーリヒがそう言った直後、一九四三年から今まで謳われない戦いに身を投じてきた一個中隊百人が詰める施設内の会議室前面に置かれたスクリーンにアルティンと呼ばれるチタン製フルフェイスヘルメットを被った男の姿が映し出された。

「私は今回の件でヴォルクグラード人民学園から全権を預けられた者です」

「お互い敬礼できる立場ではなくなりましたね」

山岳フローラの迷彩服を纏う男はエーリヒの返答を待たずに話し始める。

「昨年の九月一日から三日にかけて発生したフレガータ学校占拠事件において、当時タスクフォース563に所属していた五名のスペツナズ隊員が殉職しました」

「事件解決に当たったヴォルクグラード人民学園の特殊部隊が子供達ごとテロリストを皆殺しにした——とグレン&グレンダ社が発表したあの事件ですか」

エーリヒは心に苦いものを覚える。サカタグラーダに校舎を構えていたアルカで働くグレン&グレンダ社社員の子供達が通うフレガータ小学校を占拠したテロリストはSACS

の残党であり、同年のトランシルヴァニア戦争で彼らの母体を殲滅できなかったのは紛れもなく当時M A C Tのリーダーであった自分の責任だからだ。

「そうです」

バイザーの付いたゼニートのヘルメットが僅かに縦に揺れる。

「しかし事実は違う。グレン&グレンダ社はそう公式発表しましたが、実際には隊員達は誰一人として子供達を巻き添えにはしていない。それどころか、殉職した五人の隊員は子供達を庇い、テロリストの凶弾から彼らを守って命を落としたのです」

会議室の中でざわめきが起きる。しかしエーリヒとノエルだけは微動だにしない。

「アンドレイ・ナザロフ」

ゼニートは語る。この隊員はフレガータ小学校に突入後、犯人グループとの激しい銃撃戦の最中、不意を突かれて致命傷を負ったにも関わらず常人では発狂してもおかしくない程の激痛に耐えながら部隊を指揮し続けた。やがて大量出血によって戦闘不能に陥ってしまったこの隊員は医療班が駆け付ける直前に自暴自棄に陥ったテロリスト達が子供達に手榴弾を投げ付ける光景を目にする。彼は最後の力を振り絞って手榴弾に覆い被さり爆発を受け止めて命を落とした。駆け付けた医療班が目にしたのは血の海に横たわる事切れたこの隊員と彼を囲んで大声で死なないでと泣きじゃくる子供達の姿だった。

「セルゲイ・リブチェンコ」

ゼニートは語る。負傷した女性教師を手当てしている最中、この隊員は教室に突如現れ

たテロリストを撃ち倒すも深手を負ってしまった。女性教師を医療班に引き渡した彼は自分が致命傷を負っていることを隠して再度学校の中に入り、校庭から脱出しようとする子供達に銃撃を浴びせていたテロリスト達の居場所を特定し砲撃を要請してから絶命した。

「ローマン・ウステイノフ」

ゼニートは語る。フレガータ小学校への突入後、教室に押し込まれていた子供達を発見したこの隊員は校舎外から増援が来るまでの間、圧倒的多数のテロリスト相手に孤軍奮闘し数十発の銃弾を全身に浴びた。それでも彼は決して引き下がらず、死してなおその巨体でドアを塞ぎテロリストによる子供達の虐殺を防いだ。

「ボリス・バリエフスキー」

ゼニートは語る。この隊員は食堂に監禁されていた子供達と教師を避難させている最中にテロリストから投げ付けられた手榴弾の爆発で両足を吹き飛ばされた。だが彼は出血多量で息絶えるまで拳銃や拾い上げたテロリストの武器まで使って子供達を追うテロリストを足止めした。彼の奮戦によって多くの子供達が脱出することができた。

「ルスラン・アミルスキー」

ゼニートは語る。事件の二週間前にソ連本国で結婚式を挙げたこの隊員は自力で女子生徒二人をシェルターに運ぶ最中、校舎から脱出してきたテロリスト達と鉢合わせた。彼は女子生徒に逃げると叫び、自らはその盾となり奮戦するも生還は叶わず殉職した。

「しかしエーリヒ・シュヴァンクマイエルからアルカの真実を暴露されて窮地に陥ってい

たグレン&グレンダ社はその事実を報道するどころか、真実を自分達のために捻じ曲げてプロトタイプに対するネガティブキャンペーンの材料とした！」

話し終えたゼニートは激しく机を叩いて立ち上がる。

「これは命を落とした隊員達に対する最大の侮辱だ！」

そして彼はモニター越しにエーリヒ達を指差した。

「私は絶対に許せません。グレン&グレンダ社がこの事実を公表し、隊員達の名誉を回復しない限り、我々が人質の解放に応じることはありません。以上、通信終わり」

映像が切れてブラックアウトした画面に映り込むエーリヒはとあることに気付く。

「一人足りない」

タスクフォース563にはフレガータ小学校で殉職した先の五名とエレナ・ヴィレンスカヤの他にもう一人隊員がいたはずだ。その名は――。

注1 特殊核爆破資材。



ゼニートとの会談が事実上の決裂という形で終わってから七分十二秒後、エーリヒ・シユヴァンクマイエルはサンキョ・デポ裏手にあるケヤキ並木に足を運んでいた。

「お疲れのようですが貴方には休んでいる時間など存在しないのです」

木々に背を預けて脳内の諸問題を整理していたエーリヒにオリーブドラブの軍服に身を包んだヴァルキリーが青めいて見える長い黒髪を靡かせながらヘブライ語で声をかける。

「アルカを管理する能力と自信、責任感さえも失ったグレン&グレンダ社は今や民間軍事企業への軍務外注化を積極的に進めています」

シャローム学園からSW社にオプザーバー兼監視役として派遣されている大人びた少女ことサブラ・グリーンゴールド中佐は淡々とした様子で話した。

「それは我々の後ろ盾を得た貴方が選択肢の殆どを失ったグレン&グレンダ社に『アルカ各校の卒業生を統一化された民間軍事企業に所属させ、それを各学園が雇って今まで通りの学園大戦を行ってみては如何でしょう』という提案を持ちかけたからです」

ドラケンスバーグ学園に在籍していた一九四六年、トラック戦争で和州学園出身の倉木マツリに引導を渡しラミアーズの組織的行動を終焉に追い込んだヴァルキリーの言葉にはどこか物事を他人事のように捉えた響きが過分に含まれていた。

「しかし私達が貴方を支援するのは、ただ単にプロトタイプの王である貴方と良い関係を築けていればイスラエルという道徳的にも社会的にも正当化されたユダヤ人国家が世界の覇権を事実上掌握する上で都合が良いからです。私達は世界を直接統治するつもりはありません。何故なら世界を直接統治してしまえば、その中で生まれたテロや憎悪という歪みが確実に我々を襲うからです。だからこそ我々はグレン&グレンダ社を支配者としたまま、

彼らを歪みに対する盾として使いながらこの世界を手に入れるのです」

エーリヒはサブラの言葉から情念や熱意のようなものを全く感じなかった。

「安価な兵器」

紫の双眸に冷たい輝きを宿すサブラはエーリヒの前で小指を折り、

「高度な戦闘のノウハウ」

次に薬指を折り、

「銃がなければスーパーでも働けないようなプロトタイプ」

最後に中指を折った。遺伝子にプログラムされたヴァルキリー特有の指の折り方だ。

「SW社がアルカにおける戦争ビジネスを独占できた要素はこれだけではありません。

我々は今年五月に独立を果たしたイスラエルという道徳的にも社会的にも正当化されたユダヤ人国家が中東での覇権を握るため貴方から貸し出された多数のプロトタイプをシナイ半島やゴラン高原における戦闘に投入する見返りとして、同社が代理戦争の一元化を効率的に進めるための根回しや準備を行う上で必要な情報をサヤンから提供させたり、それらに反対する関係者をモサドの破壊工作で抹殺しました。無論、世界各国にあるユダヤ人コミュニティからの潤沢な資金援助も忘れてはいけません」

「ここでしか生きられず、アルカという強い呪いに自分から飛び込んでいるような自分がX生徒会の眼鏡に叶うような人間だとは到底思えません……」

「確かに貴方は人格的な問題の多い人物です。しかし、上手く利用した場合のメリットの

数は問題点を大きく上回る。X生徒会は単にそう判断しました」

「よく堂々と面と向かってそこまで言えますね。人に嫌われると思わないんですか？」

「好き嫌いなどどうでも良いことです。私は歯車に過ぎません」

サブラはそこまで言ってから唐突に歩き出してダンボールに入った捨て猫を抱え上げる。

「理想的なプロトタイプやヴァルキリーが他者に対する優しさや同情の心を持つ必要ありません。私達は消耗品ではあっても温かみを持った人間ではないのですから」

「うん……？」

エーリヒは続いてどこから取り出した紙パックの牛乳を猫に飲ませて微笑むシャローム学園X生徒会の全権代理人を見て何とも言えない表情になった。

「うーん……？」



アルカ北西、ブラッド・シーの海上をガーランド・ハイスクルの艦隊が進んでいる。

「もうこんな時間か」

緋色に染まる世界で直援を行っていた艦載機がエセックス級大型空母に戻っていく様子をアトランタ級軽巡洋艦の甲板上から目にした水兵は一日の終わりを悟った。

「この戦争はいつ終わるんだろうな」

「グレン&グレンダ社に投書でもしてみたらどうだ？」

ヘルメットを被りライフジャケットも羽織った水兵達は有り難いことに今日全く出番のなかった二十ミリ機関砲のすぐ横で会話を交える。

「冗談はやめてくれ。ヤマガタがアルカになったのはあの会社の上役連中が投げたダーツの矢がたまたま地図に当たったからだって聞いたぜ」

あながち嘘とは言い切れない噂話に揃って苦笑した二人が備品の片づけを始めた直後、彼らのすぐ後ろを見慣れない顔のメンテナンスクール達が話しながら通り過ぎていった。

「なあ」

「どうした？」

水兵の一人が訝しげな表情になる。

「あいつらの訛り、どこか変じゃなかったか？」



夕飯の準備を進めていたエレナの手に跳ねた魚の血が付着した。

「……ッ」

夕日に照らされた掌を見た瞬間、エレナはタスクフォース563の集合写真が片隅に飾られた孤児院のキッチンから昨年九月三日のフレガータ小学校へとタイムスリップした。

「……ッ」
蒸し暑い体育館。垂れ流された尿とその臭い。

「……ッ」
爆発と突入。母親を呼び求める顔のまま黒焦げになった子供の顔。

「……ッ」
崩れた赤レンガの壁。そこに紛れて転がる小さな下半身。

「……ッ」
だらりと手を垂らした子供を抱き抱えて運ぶ特殊部隊の兵士。

「……ッ」
まだ張り巡らされた爆弾の導線が残る弾痕だらけになった体育館の壁。

「……ッ」
担架に横たわる血塗れの少女。

「……ッ」
爆発に巻き込まれて四散した犯人の死体に怨嗟の声を浴びせながら発砲する保護者達。

「……ッ」
押収され、校庭に横並びになった大量の使い捨て式ロケットランチャー。

「……ッ」
並ぶ黒いく小さい死体袋。耳障りな羽音を立てて集る蠅。

「せんせい、大丈夫？」

「泣いてるの？」

子供達から自分を心配する声をかけられて現実世界に戻ってきたエレナは自らの頬を涙が伝っていることに気付く。

「大丈夫です。先生、玉葱を切っていたんです。大丈夫です」

手の甲で目尻の滴を拭ったエレナは子供達を部屋に戻す。

「グリヤーズヌイで殺戮の限りを尽くした私があの事件を思い出して泣く……偽善だな」

そして自嘲気味な口調で呟いた彼女は窓外に赤い粒子を見つけ、その七分十二秒後には濃緑色のマナ・ローブを纏いノエルと夕暮れの空で激しく交錯していた。

「やはりテウルギストはそういう輩か！」

空中で火花が一つ輝き、それが消える前に新しい火花が別の場所で生まれる。

「貴様らの世界に私を——いや子供達を巻き込むな！」

エレナは両腰の鞘から引き抜いた二本の鉞をクロスさせて南アフリカ共和国製チェストリグ以外は自分とほぼ同じ恰好をしたヴァルキリーに切り掛かった。

「ある日、私達はいつの間にか自分が難民になっていることに気付いた」

一方のノエルはガリル自動小銃のマガジン基部で交錯する鉞を受け止める。

「生き残っても何も良いことはなかった」

「知ったことか！」

左右に後退翼の伸びる背部飛行ユニットを背負ったエレナはそこに備えられたブースターを噴射してマナ・ローブの燕尾を激しく揺らしながらノエルを下へ下へと押ししていく。

「ドイツ連邦共和国は私達に安心して暮らせる場所を提供すると約束した」

「知ったことか！」

エレナは右手で錨迫り合いを演じたまま左手に携えていた鉈を放り投げ、腰から抜いた P P S h ・ 4 1 短機関銃をなおも話し続けるテウルギストの顔面に向け連射した。

「しかしフレガータ学校占拠事件というグレン&グレンダ社のネガティブキャンペーンを真に受けた国民はプロトタイプを受け入れを激しく拒絶した。そして私達はヨーロッパから遠く離れた南アフリカ共和国のポムフレットを新天地として与えられた」

「知ったことか！」

弾かれたように首を左右に揺らして至近距離から殺到する七・六二ミリ弾を尽く躲したノエルはカウンターの頭突きをエレナの顔面に叩き込み大流血へと追い込む。

「アスベスト鉱山に囲まれたポムフレットは大気・水・土壤に健康を脅かす危険が潜んでいるという理由で放棄された死の土地だ」

「知ったことか！」

ノエルは顔中を赤く染めてなお激昂の声を発するエレナと体勢を入れ替えて彼女を地面に叩き付けようとしたが、一九四八年現在唯一生き残っている第一世代ヴァルキリーはギリギリで立て直し背面超低空飛行で木々を削り取る。

「カラハリ砂漠の片隅にある不毛の地は最も近い町から百六十キロも離れていた」

「知ったことか！」

エレナはコマンドサンボ仕込みの投げでノエルを前方に放り飛ばす。しかし投げられた側は軽やかに空中で回転——軽やかに着地しガリル自動小銃を構えて発砲した。

「耕作に適した土地もない。雇用する産業もない。私達はそんな場所で貧困と飢餓という真つ暗な未来と向かい合わせで何の可能性もない絶望的な生活に入った」

「知ったことか！」

風を切る音を立てて迫り来る七・六二ミリ弾を左右の急機動回転で回避したエレナはノエルへの肉薄に成功し、ドラムマガジン内の弾丸を全て撃ち尽くした左手の P P S h · 4 1 短機関銃を投げ捨てつつ右手に携えた鉈を振り上げる。

「自由ヴォルクグラード軍を名乗る組織がルナ・マウンテンに人質を取って籠城した」
「知ったことか！」

奇遇にも同じタイミングで弾切れを起こしたガリル自動小銃にノエルが新しい二十五発入りマガジンを差し込む隙を与えずに得物を左ハイキックで弾き飛ばしたエレナはお互いの出生に端を発する長い因縁に一気にケリを付けようとした。だがその瞬間である。

製本版に続く



<http://utsutenkai.web.fc2.com/>